

映画「ライフアーズ」の製作における「変容の物語」

坂上 香

はじめに

2004年6月に、ドキュメンタリー映画『Lifers ライフアーズ 終身刑を超えて』¹（以下『ライフアーズ』）を完成させてから、すでに2年が経過しようとしている。この間、日本社会における犯罪や暴力をめぐる諸事情—犯罪そのものというよりも、犯罪に関する報道や政策、そして社会の受け止め方や反応—は良くなるどころか、悪化の途をたどっているようにしか思えない。私自身、『ライフアーズ』の上映会や関連イベント等で日本各地を歩いてきたが、「犯罪の凶悪化」を理由に、さらなる厳罰化や監視化を積極的に支持、もしくは容認する声を耳にすることも多く、正直、やりきれない思いに駆られている。

しかし、逆にそういう状況だからこそ、『ライフアーズ』を媒介にして、オーディエンスと語りあう意味があるのかもしれない、とも思う。各地の上映会場では、「犯罪者に対して、全く違うイメージを持っていた。人がこんなに変わるなんて」と素直に驚きを表現する人、「今の気持ちをうまく言葉にできない」と思い詰めた表情で立ちつくす人、また逆に「更生できない犯罪者もいる」「自分の子どもが殺されても同様の映画を撮るのか？」などと強い反発を見せる人たちにも出会う。それぞれの感じ方や受け止め方は決して一枚岩ではなく、時に両極端であったりするが、「当たり前」と思い込んできたことに対して衝撃を受けたり、疑問や抵抗を感じるという点では共通しているように

思える。私は「そういった感情がどこから来るのかを考え続けてほしい」と伝えるようにしている。

本稿では、『ライフアーズ』で描こうとした「変容の物語」がどこから来るのかを、ひも解いてみたい。

ライフアーズとは誰か

題名につけた“ライフアーズ” (Lifers) とは、終身刑を意味する Life imprisonment もしくは Life sentence を科された受刑者のことを指す。表記を英語とカタカナにしたのは、Lifers にあたる適切な訳語が見つからなかったからである。直訳すると「終身刑受刑者たち」となるが、日本で「終身刑」というと、一生刑務所に服役する姿をイメージしがちだ。それでは本映画が意味するものとは大きくかけ離れる。悩んだ挙げ句、英語のまま Lifers とし、カタカナをふって、副題をつけることにした。

まず、米国の Life sentence (終身刑) 事情について、若干説明しておく必要がある。米国には2種類の Life sentence が存在する。ひとつは仮釈放の可能性が全く与えられない Life imprisonment without possibility of parole (以下 LWOP) で、もうひとつは Life imprisonment with possibility of parole (以下無期刑) だ。米国では主に、この LWOP と無期刑の2つを、Life sentence と総称し、2006年現在合わせて13万人余り存在している。

刑の長期化や仮釈放の減少といった影響を受け、最近では LWOP の比率が増える傾向にはあるが、それでも実際は日本の無期懲役に類似する

無期刑がLifers(Life sentenceを受けた者)の9割を占め、LWOPは1割程度だ。『ライファーズ』の舞台であるカリフォルニア州はLifers人口が最も多い州であるが、そこでも現在無期刑28,912名、LWOPは3,400名と圧倒的に無期刑受刑者が多く、その割合も前述の比と同様である²。

しかしながら、本映画に登場するLifersは、上記に掲げた定義に限定されない。私は映画のなかでLifersの解釈を広げ、「一生罪に向き合い続ける人」と定義し直し、あえて社会復帰した者をも含んだ。主人公は4人の男性で、レイエスとケルビンの2人は無期刑にあたる文字通りのLifersであるが、ジミーとチャールズの2人はすでに刑務所から釈放され、社会生活を送る元有期刑の受刑者である。私が光をあてたかったのは、終身刑という制度や刑罰自体ではなく、生き直すプロセスを経て、自分の犯した罪に向き合おうとするようになった受刑者、もしくは元受刑者たちの存在やその有り様だったからである。副題を「終身刑を超えて」とし、キャッチコピーに「人は自分の中に作り上げた『牢獄』からいかに自由になれるか」としたのも、解釈や議論を刑事政策的なレベルに留めたくなかったからである。

『ライファーズ』には、LWOPが登場しない。理由は簡単だ。同州では、死刑囚やLWOPといったカテゴリーはそもそも社会復帰が想定されていないため、彼らは更生プログラムの対象から除外されていることが多い³。言い換えると、罪に向き合うことも、生き直すことも、彼らには最初から期待されていないことになる。同様のことが、女性受刑者にもいえる。同州では、有期刑、無期刑に関わらず、女性受刑者向けのプログラムが極端に少ない。『ライファーズ』に登場する更生プログラムも、撮影当時は女性受刑者に全く手が届いていなかった⁴。このように特定のカテゴリーが更生の機会を奪われていたり、男性中心主義であることなど、同州の矯正のあり方には様々な問題が存在する。しかし、今回の映画では、こういった問題を直接的に批判するのではなく、実存する一つの民間更生プログラムに焦点を絞り、そのなかで変容を遂げ

てきたLifersの物語に注目することにした。

アミティという場

『ライファーズ』の舞台は、米国カリフォルニア州の男性刑務所だ。2002年12月、同州の南部から北部まで点在する5つの刑務所を、1ヶ月近くかけて撮影の南幸男氏、録音の森英司氏、そして助手兼運転手のフェルナンド・コルテス氏と共に私は駆け回った。当時この5つの刑務所では、民間更生施設「アミティ」(Amity、友情や友愛を意味する)のプログラムが運営されており、その活動や参加者らのインタビューなどを撮影するためだった。

私とアミティとの出会いは、11年前に遡る。1995年、当時テレビの世界に身を置き、NHKおよび民放のドキュメンタリー番組を手がける制作会社のディレクターだった私は、暴力や犯罪の背景、そして欧米社会における対応策のあり方といった 이슈に強い関心を持ち、関連番組を作り始めていた。アミティを紹介してくれたのは、その一連の取材で出会ったスイスの思想家アリス・ミラー⁵である。

ミラーは、残虐な罪を犯す「犯罪者」の多くが、幼児期に受けた深刻な虐待体験に囚われていると指摘し、根本的な問題解決には、その被虐待体験を明らかにしていく過程と、本人による受容と自覚が不可欠だと主張する。アミティは、まさにミラーの思想を実践している場であり⁶、本映画からもその趣向が随所に読み取れるはずだ。私は社会復帰施設で行われているワークショップを取材し、被虐待体験を明らかにしていく過程を番組化⁷したが、それを機にLifersの存在を知り、彼らとの交流を深めてきた。

そもそもアミティは、アリゾナ州のツーソンで、1981年に薬物依存者の社会復帰施設として始まった。既存の医療・福祉・司法とは異なる、独自のアプローチで25年余り活動を続けてきているが、その根底には、セラピューティック・コミュニティ(Therapeutic Community 治療共同体、以下TC)的発想が流れている。それは、問題や病気などを抱える「当事者」たちが、互いに影響を与えあいながら、回復を促し

あうセルフヘルプ（自助）的空間や、そのアプローチ自体を意味する。自発的な参加、グループ・プロセスの利用、対等な人間関係と固定化しない組織構造、問題を抱えた「当事者」による運営など、TC的概念は、アミティには欠かせない要素を含んでいる⁸。米国内にはTCが400余り存在すると言われており、アミティの創設者らも別のTCの卒業生である。

現在アミティは、南西部の3つの州で、主に政府や行政機関からの依託や助成金によって運営されている。いずれの施設でも、薬物の問題を抱えていることが参加の条件であるが、実際は、それ以外の問題（反社会的行動や様々な嗜癖問題）を複合的に持ち合わせている場合が多い。

施設の形態は多様だが、1990年代までは主に、社会内処遇や受刑者のフォローアップ・ケアとして機能してきたといえる⁹。ただし、本映画の舞台である刑務所内プログラムの広がりには目覚ましく、最近では社会内処遇よりも大きなウェイトを占めているといえる。そもそも同州の矯正施設がプログラムの外部委託を開始したのは、刑務所の過剰拘禁や職員不足に伴う暴力事件の続出や薬物問題の深刻化（薬物事犯の高い再犯率や刑務所内での薬物事件の頻発）からであったといわれている。1990年の開始時点では、同州の矯正施設における外部委託はアミティのみで、RJドノバン刑務所1カ所であった。対象者も200名と少数だったが、1990年代半ばには他団体にも門戸が開かれ、2000年には対象者が9000人までに拡大された。アミティは現在、7つの刑務所で1500人余りの受刑者を対象にプログラムを運営している。

刑務所内プログラムの参加者に共通するのは、「更生不可」と言われ続けてきたという点だ。その多くが、暴力犯（70%が殺人、傷害致死、レイプ等の凶悪な罪を犯している）であり、深刻な前科前歴（平均逮捕回数は27回で、平均受刑回数は17回）があり、長期に渡る薬物使用歴（全員が10代から薬物使用）を持ち、少年期から問題行動が見られる（半数が12歳以前に家出を試み、平均4ヶ月の少年院生活を体験）

¹⁰。こういった暴力傾向の強い受刑者たちの多くが、ドラスチックな変容を遂げる。たとえば、通常1年～一年半に渡るプログラム終了後の素行が劇的に改善されたという調査結果や、参加者の再犯率が27%と驚異的に低いことでも知られている¹¹。この数は非参加者の75%と比べて3分の1であることからわかるように、アミティのプログラムは、矯正の世界にパラダイム変換を起こしたといっても過言ではない。

更生のあり方

アミティでは、参加者は自らをレジデントやスチューデントと呼び、スタッフはデモンストレーターやティーチャーと呼ばれる。その呼び名が示すように、ここは治療や矯正の場というよりも、「学び合う場」である。スタッフの大半がかつて薬物の問題を抱えていた薬物依存者であったり、服役体験があることから、犯罪学者のヤブロンスキーは彼らを「当事者セラピスト（Experienced Therapist）」と名付け、いわゆる専門家とは異なる役割を果たしていると評価する¹²。当事者セラピストが参加者にとって達成可能なロールモデルと化すことにより、従来の治療や矯正現場とは異なるより平等な人間関係（＝学び合う場）が成立すると考えられる。

活動の基本は、グループの作用を利用したグループ・ミーティングだ。また、進度（基本は四段階）やテーマ別に組まれた独自の教材もあり、講義形式、ゲーム、アート、音楽、ワークショップなど、柔軟で多様なスタイルを組み合わせた、創造的でユニークな学校といった印象を受ける¹³。刑務所内プログラムには様々な制約があり、当然ながら社会内処遇施設のように自由ではない。しかし、薬物を断つことを目指すだけではなく、全人格的な発展を目指すという点においては同様の試みを行っている。

例えば、映画には、ジーンズ姿の男性たちが、教室のような場所で、他の男性たちから「寛大」「リーダー的存在」「ゲームが上手い」などと褒められ、子どものように照れたり笑ったりするシーンがある。これは、サンディエゴのRJドノバン刑務所内にあるアミティの施

設の様子で、アファメーション（affirmation、他者や自分を肯定的に捉える）と呼ばれるカリキュラムの一部だ。互いのいいところを見つけ、それを互いに伝え合う、という一見単純に思えるこのアプローチこそ、薬物や暴力にしがみついていた受刑者らに欠落していた体験であり、厳罰的手法とは対局的、人間性を回復しようとするアミティの姿勢を象徴しているといえる。

サンクチュアリにおける語り

アミティが、幼少期の虐待体験に注目したミラーの思想を取り入れていることはすでに紹介したが、特に受刑者の大半に深刻な被害体験（特に幼少期の被虐待体験）があることは、欧米を中心とした様々な研究によって明らかにされてきた¹⁴。彼らの多くは、福祉・司法・医療制度の網からこぼれ落ちてしまった結果、加害者に転じたともいえる。しかし、一般に矯正分野では、この点が無視、もしくは軽視されてきた。受刑者はあくまでも罰せられる対象であり、過去の被害体験を受け止めるという発想自体が存在してこなかったのである。アミティが注目してきたのはこの点であり、被害体験を「徹底的に」語れる場を矯正現場内にも積極的に作ってきたといえる。

『ライフアーズ』には、「サンクチュアリ（安全な場）」という言葉が繰り返し登場する。受刑者の多くは、自らの被害体験を語ることがない。記憶自体を長い間封印してきている者や記憶自体がないという者も多い。このような体験を語る際、もしくは断片的な記憶を語ろうとする際、恥や屈辱や否定といった強い感情が伴う。そのため、語り手が強い感情を露にしても構わないと（＝「安全」だと）感じる必要がある、そういった語りを可能にする空間を、彼らはサンクチュアリと呼ぶ。そこには、語りに耳を傾ける「聴き手」の存在が不可欠であり、また、聴き手によって受け止めてもらえるという信頼感や平等に語り合える雰囲気なくてはならない。ここでLifersの存在が重要なのは、彼ら自身が同じような被虐待体験を持ち、

自らもサンクチュアリを体験してきた立場であるからだ。被害体験を徹底的に言語化する「被害の語り」を抜きにして、「加害の語り」（加害体験を徹底的に言語化することによって、自らの罪に向き合うこと）に飛躍できないことは、彼らが一番良くわかっている。そして、「被害の語り」がいかに過酷な作業であるかということも、彼らは体験として知っている。

アミティでは、「被害の語り」が激しい感情を伴って噴出する。「死んだ祖母の代わりに、祖父から日々性行為をさせられた。姉は見て見ぬふりだったが、彼女もまた同じ目にあっていた」「父親から足の爪をペンチで一枚一枚むしり取られた」「七歳の頃から母親に売春をさせられ、嫌だと言うと食事を与えてもらえなかった」など、耳を疑いたくなるほど凄まじい内容ばかりだ。それを彼らは、細部に渡り、繰り返し語れることを「後押し」される。時として嘔吐や発熱など、体調不良を引き起こす。なぜそこまでして語らねばならないのか、と幾度思ったことだろう。「被害の語り」を徹底させることは、想像以上に厳しい。

創設者の一人で、自らも受刑体験を持つナヤ・アービターによると、このような「被害の語り」が、自らの抱える問題（他者への加害行為や自らを傷つける行為）への気づきにつながるという。言い換えると、「加害の語り」には、「被害の語り」が欠かせない。興味深いことに、私が取材した男性受刑者のほとんどが、「加害の語り」以上に、「被害の語り」が辛いと答えた。これは特に、男性にみられる傾向のようで、男は強くあるべきという固定観念が強いため、被害者＝弱者という捉え方をしていることが影響していると、アービターは分析する。

「加害者は自らを被害者とみなすことで、責任逃れの口実にしがちだ」とはよく言われることだが、アミティの経験からは、むしろ逆のことがいえる。責任をとる

ためには、むしろ自らの被害体験に「徹底的に」向き合うことが不可欠であるということ。そしてそれは、繰り返し語る、という方法によって可能になるということである。繰り返し語ることから、自らの過去を対象化し、客観化することが可能となり、犯罪に至る経緯を自らの人生の一部として受容し、繰り返さないための道筋が見てくるからである¹⁵。

おわりに

Lifersと知り合って、10年余りが経過した。その間、私は彼らの「変容」を目撃し続けてきた。過去に「消し去ることのできない」被害を受け、また自ら「取り返しのつかない」罪を犯してきた彼らが、もがき苦しみながら希望を取り戻していく姿。抵抗や受容の過程を繰り返し、行きつ戻りつしながらも、確実に成長していく姿。レイエスのように、仮釈放を却下され続けても、諦めないLifersの姿。そして、そういった彼らの「変容」が、他の受刑者への希望（自らの変容への渴望）につながり、新たな変容が促される場面にも立ち会ってきた。

『ライフアーズ』は、目撃者である私の体験の断片をつなぎ合わせた、一つの作品に過ぎない。しかしそんな一つの作品が、日米両国の矯正施設¹⁶、教育・医療・福祉・司法機関、劇場、ライブハウス、カフェ、コミュニティセンターなど、ジャンルを超えた多様な場で上映され、様々な「当事者」の目に触れ、幾つもの対話や議論を起こしている。一つの映像が、国境を超えた「ささやかな変容の連鎖」を促していると言ったら、言い過ぎだろうか。

私たちは、ロールモデルとしてのLifers（犯罪に限定されない様々な問題を抱えながらも、回復の途上にある当事者）を、いかに生み出し、いかに後押しし、いかに社会の中で生かすことができるのか。そもそも「語る／聴く」という行為を、私たちはどのように捉えてきたのだろうか。それはまた、私たちの眼差しをどのように形成してきたのだろうか。『ライフアーズ』が、そんなことをそれぞれの立ち位置から考え

直すきっかけになってくれれば嬉しい。

- 1 『Lifersライフアーズ 終身刑を超えて』監督・プロデューサー・編集：坂上香、撮影：南幸男、録音：森英司、音楽：ロジャー・スコット・クレイグ、製作&配給：out of frame、Lifers映画支援プロジェクト、製作年月：2004年6月。<http://cain-j.org/Amity/Lifers/index.html>
- 2 California Department of Correctionsのウェブサイト <http://www.corr.ca.gov/> Fact Sheet 2006 First Quarterより。
- 3 アミティにもごく少数のLWOPは存在するが、特別の手続きを経なければならぬ。許可されても参加が制限されたり、途中で急に打ち切りということも多々ある。創設者のナヤ・アービターは、2000年頃からカリフォルニア州矯正局にLifersを中心としたプログラムを提案してきたが今のところ見通しがたっていない。
- 4 ロサンゼルスにあるアミティの社会復帰施設では、刑務所から出所した女性の受け入れが2005年から開始した。それに伴い、女性刑務所でのプログラム化も進んでいる。
- 5 Alice Millerはスイスで精神分析医を営んだ経験から、精神的疾患・障害と幼少期の虐待体験との関係に着目した著書を1970年代末から世界じゅうで出版し、注目を浴びてきた。『魂の殺人』『才能ある子のドラマ』（新曜社）などが代表作。
- 6 アミティでは「アリス・ミラーのパラダイム」と称したモデルを作り、以下のような視点をカリキュラムに組み込んでいる。1.抑圧してきた体験を思いだし、現実にあったこととして認める。2.安全な場で、適切な方法で、怒りを表現する。3.同じような体験をした「当事者」とグループを行い、かつては被害者であったことを認める。4.自分自身や他人に対しての怒りを、当たり構わずまき散らすことをやめる。5.和解するということ、過去との折りあいをつけるということを理解し、子ども時代の体験を認識する。
- 7 NHK BS-2 BSスペシャル『閉ざされた魂の叫び〜アリス・ミラーが解く子ども時代』（1996年放映）、とNHK BS-1 日曜スペシャル『隠された過去への叫び〜米・犯罪者更生施設からの報告』（1998年放映）
- 8 TCは1940年頃の英国で、従来の「医者と患者」という「上下」「主従」関係ではない、新しいスタイルの「治療」をめざして、二人の精神科医が精神病院で始めたといわれている。米国では、第二次世界大戦後に本格化し、ベトナム戦争を機に広まった。アミティの創設者らは、かつてSynnanon（シナノ

ン)と呼ばれるTCに身を置き、そこでの体験や失敗を生かしてアミティを立ち上げた。現在の欧米諸国では、TC的アプローチが医療、教育、福祉、矯正機関などにも広く浸透している。Kennard, D. *An Introduction to Therapeutic Communities*. Jessica Kingsley Publishers, 1998に詳しい。

日本では1960年代に「治療共同体」という訳語が与えられ、一部の精神医療において、英国式の手法が取り入れられてきた。最近、様々な問題に対するセルフヘルプグループ(自助グループ)が各地で急速に広がっているが、社会的認知度は低い。

- 9 アミティには、男女混合、男性、女性、母子、親子を対象にした施設があり、裁判所や矯正施設等から送られてくることが多い。その他、過剰摂取等で入院した患者やホームレスが、医療・福祉機関から送られてきたり、家族や知人からの紹介で来ることもある。
- 10 Wexler, H.K., Melnik, G., Lowe, L., Peters, J. Three-Year Reincarceration Outcomes For Amity-In-Prison Therapeutic Community And Aftercare In California. *The Prison Journal*.79(3), 1999, 321-336.
- 11 Mullen, R., Rowland, J., Arbiter, N., Yablonsky, L., Fleishman, B. California's First Prison Therapeutic Community: A 10-Year Review. *Offender Substance Abuse Report*. 1(2), 2001, 17-32.
- 12 Yablonsky, L. *The Therapeutic Community: A Successful Approach For Treating Substance Abusers*. Gardner Press, Inc., 1994.
- 13 具体的なカリキュラムについては、坂上香/アミティを学ぶ会編『アミティ [脱暴力] への挑戦 傷ついた自己とエモーショナル・リテラシー』日本評論社、2001年に詳しい。
- 14 坂上香「被害と加害の連鎖を断ち切るために—治療共同体「アミティ」の試みから」藤森和美編『被害者のトラウマとその支援』誠信書房、2001年
- 15 坂上香「更生における『当事者』の役割を考える—映画『ライファーズ』に見る『アミティ』の眼差し」『刑政』116巻6号, 37-38.
- 16 特に、日本国内の矯正教育機関において、刑務所を舞台にした映画が、しかも自主製作映画が、教育の一環として上映されたのは、『ライファーズ』が初めてであったことを記しておきたい。